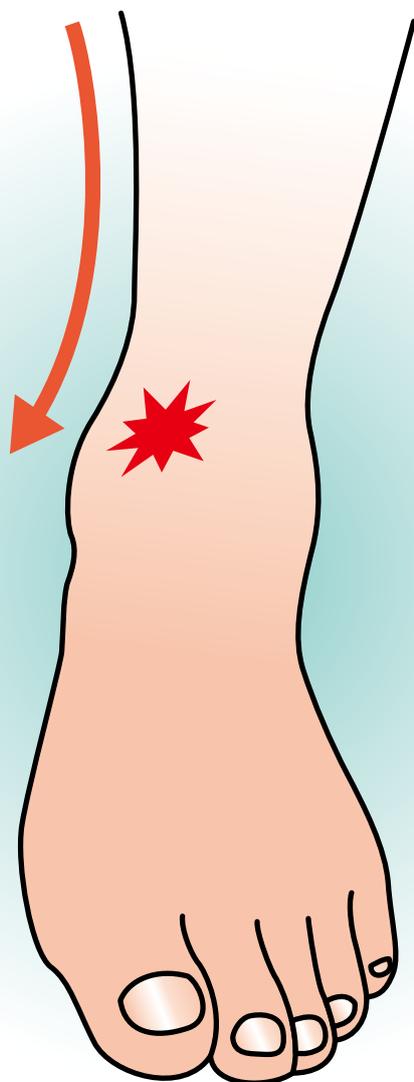


変 形 性
足 関 節 症



変形性足関節症

症状

◆変形性足関節症とは—

足関節の軟骨に変性を生じた状態が変形性足関節症で、外傷や他の疾患による二次的な足関節症と、明らかな原因が特定できない一次性変形性足関節症に分かれる。



足関節の内反(矢印)や、関節の腫脹(楕円)が認められる



◆症状

変形性足関節症患者では、歩行時に増強する足関節痛を主訴とする。時に足関節の腫脹を伴い、進行期では歩行時や動作時に礫音を聴取する。骨棘による衝突が存在する場合、可動域制限が出現する。内反型変形性足関節症では足関節の不安定性を認めることが多い。

原因病態

◆原因

外傷による変形性足関節症としては、脛骨天蓋骨折や足関節果部骨折に対して正確な整復が得られなかった場合や、脱臼を伴った症例で発症することが多い。他の疾患による二次的なものとしては、結核や化膿性関節炎による足関節症のほかに、末期の後脛骨筋腱機能不全症により足関節に変性をきたすものなどがある。

一次性変形性足関節症は慢性的な足関節不安定性を有しているものが多く、女性に多く、ほとんどが両側性である。正座をはじめとする我が国特有の生活様式が関係しているのではないかと考えられている。



脛骨下端関節面の内反が認められる

◆病態

外傷や感染、関節炎により関節軟骨に変性が生じることから本症を発症する。足関節は後脛骨筋腱とアキレス腱による牽引により内旋する方向に力が働くが、足関節不安定症では前距腓靭帯による制御ができなくなり、内果関節面から変性が出現する。幼少時より長期間にわたる慢性的な足関節不安定症では脛骨下端関節面が内反を示し、本症が進行する。

診断

◆以下の基準に合致したときに変形性足関節症と診断できる。ただし本症は原因や病態がさまざまであるため、以下のすべてを満たす必要はない。

- 歩行時に増強する足関節痛を認める。
- 触診にて腫脹を触知し、外観上、内反もしくは外反の変形を認める。
- 足関節不定性を認める。
- 単純X線立位足関節像やCTにて関節裂隙の狭小化を認める。



CTにて関節裂隙の消失を認める

病期分類

• 一次性変形性足関節症は単純X線立位足関節正面像により、以下のように病期分類される。



I期
骨硬化や骨棘のみ



II期
関節裂隙の一部狭小化



III-a期
関節裂隙の消失が内果関節面にとどまる



III-b期
関節裂隙の消失が内果天蓋関節面に及ぶ



IV期
足関節全体にわたって関節裂隙が消失